

## 追悼

村 上 幸 造

木村秀海大兄を知ったのは、某予備校の講師時代であった。大学院を修了したがまだ大学に職を得られない、三十歳前後の者が大勢集っていた。私は大兄より半年ほど年下である。大手予備校が全国展開する前の時代、関西にも多くの予備校があり、そこは中でも大きな方で、分校がいくつもあった。実力テストが年に数回実施され、その採点は各分校の教員が一堂に会して科目ごとにテーブルを囲み、採点をするようになっていた。「漢文」のテーブルはとにかく騒がしく賑やかであった。同室の「現国」「古文」の教員達からの冷ややかな視線など全く気にせず、雑談の大輪の花を咲かせていた。

しかしながら採点は「辛気臭い」ものである。漢文元締めのお先生、すぐに席を立つ。「ちょっとお茶を飲んでくる」と言っただけで、すぐなくなる。それを見て一員、「このことと思えば、またあちら。牛若丸みたいだ。でも、若くはないなあ」ということで、「牛老丸」の称号が奉られた。ただちに某女史は「喧御前」と呼ばれることになり、さらにその名付け親の人物に、その体格に因んで「皮下脂肪弁慶」の渾名が与えられた。

そういう雰囲気の中で、ただ大兄は常に訥々としていた。周りの早

口の関西弁に付いていけなかったのかもしれない。彼は屋久島で生まれ育ち、中学・高校の頃に奈良に移り住んだと聞いている。

十年ほど後、大兄も私も大学の教壇に立つようになったところ、もう一人元予備校同僚の畏友、末次信行君が、三人で研究会を始めようと、声を掛けてくれた。難波の一酒肆に集い、酒を飲むこと水の如き二人に挟まれて私はお茶を啜りつつ、話は纏まった。おこがましくも「鼎社」を名乗り月一回、関西学院大学の彼の研究室を会場に、金文について秀海先生の講義を聴く形で始まった。院生二名が加わってくれた。その一人が馬越靖史君である。最初に読んだのは「大豊藁」であった。これが流れ流れて、形を変え、名を整え、佐藤武敏先生の指導を仰ぎ、殷周史研究会として、メンバーを増やしつつ、また入れ替わって、そして今の漢字学研究会につながっている。

研究会の後の飲み会の席では、大兄は饒舌であった。その博学多識により、金文以外でもいろいろと教えられた。専門外で私が読んだ本は、たいてい彼も読んでいた。彼の挙げる私の知らない話や書籍に刺激されて、私は「雑学」に励んだ。その彼も今はもういない。

かなり以前、私の出身大学の先輩にあたる方が、一冊の書籍を

上梓された。その本の後書きに、「私はこの書物を書くために生まれてきた」という語があった。衝撃を受け、且つ羨ましかった。自分にはまだそのようなテーマがない。あるにはあるが目途がつかない。秀海よ、君は金文についての大著を書き上げるはずではなかったのか。そして私は、「木村秀海君はこの大業を成すために生まれてきた」と紹介文に書き記したかった。逝くのが早すぎる。蒼天<sup>あわれ</sup>申まず、嗚呼哀しい哉。無論、業績は一覧にあるように数多く、いろいろとその恩恵を受けてきた。特に拝稽首して、君が作った『殷周青銅器銘文綜輯』附外字部首索引と、君が編んだ『金文部首索引（呉鎮烽 font）』に深謝。

（大阪工業大学教授）



木村秀海先生近影  
(2006年5月撮影)



漢字学研究会にて  
ホワイトボードで解説をされる木村秀海先生  
(2014年6月撮影)